

国立国語研究所学術情報リポジトリ

中世説話における「たり」と「り」

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2019-02-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 梶原, 滉太郎, KAJIWARA, Kôtarô メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00001777

中世説話における「たり」と「り」

梶原 滉太郎

1

本稿で取り上げる「たり」と「り」とはいわゆる完了の助動詞である。したがって指定の「たり」はここでは取り上げない。本稿では「たり」と「り」との使用の実態について、それらを各活用形に分けて下接語に着目して記述した。

中世説話を取り上げた理由は、それらが漢字仮名交じり文で書かれていて、鎌倉時代の語法を伝えるものの一つとして適当であろうと思われるからである。

中世の説話作品は数多いが、本稿ではそれらのうち『沙石集』・『宇治拾遺物語』・『古今著聞集』・『発心集』・『十訓抄』について考察した。使用したテキストはそれぞれ次のようである。『沙石集』・『宇治拾遺物語』・『古今著聞集』は日本古典文学大系、『発心集』は校註鴨長明全集、『十訓抄』は^{新訂増補}国史大系である。

中世説話においていわゆる完了の助動詞「たり」と「り」との用例を取り上げるにあたっては上記のテキストで調べて異文の存在する例はすべて除いた。それから和歌の用例や次に示すような漢文の訓読された用例も除いた。それらは著者が訓読した場合も校注者が訓読した場合もともに除いた。

其日御記云、「……其ノ鏡八寸、^{カサノ}頭雖^モ有^リト一^ツ瑕、円規甚^ク以^テテ分明ナリ。露出^テテ^テ佛破^レタル瓦ノ上ニ。見^ル之ヲ者ノ無^シト不^ト云フコト驚^ル」。(古今著聞集 卷一)
坐禅三昧経に云はく、「今日^{こんにち}當^{あた}此事^{このこと}を、明日^{あす}造^{つく}彼事^{そのこと}を、樂^{らく}著^{ちやく}して不^ず観^{くわん}苦^くを、不^ず覺^{げつ}死^しの賊^{いた}至^{いた}るを云々」(発心集 第二)

それから「り」については「持てり」の「り」は取り上げたが「持たり」は一語と考えて除いた^{註1}。

「たり」に関しては一語の動詞である「来たる」(語源は「来至る」である。これを仮に甲とよぶことにする。)と動詞+完了の助動詞から成る「来たり」(こ

れを仮に乙とよぶことにする。)との区別が問題になる。甲も乙もそれぞれ「たる」と「たり」の部分を活用するという言い方を仮にするならば、活用する部分が終止形のかたちをとっている限りは甲と乙とは「来たる」と「来たり」とで形態が異なるので問題はない。しかしその他の五活用形はいずれも甲と乙とが同じ形態をしているので、それらをどうして区別するかが問題になる。その区別の方法は、いま考えられる範囲で少なくとも三つあるように思われる。それらは次のようである。

①甲や乙の下接語を手がかりにする方法。

②甲や乙の使われている文章の文体を手がかりにする方法。

③文脈における甲と乙との意味の違いを手がかりにする方法。

これらのうちでは特に①が有力であると思われるが、実例をあげて①②③の方法について述べよう。

まず①は下接語が①助動詞「る」・②(完了の)助動詞「たり」・③助動詞「り」・④補助動詞「給ふ」・⑤動詞、などの場合である。

①「何事にきたられたるぞ」と問給ければ、しか〜の事待る也と聞えけり。
(十訓抄 一)

②「あれはいかに。なににきたりたるぞ」ととひければ、とかくのここといはず、
(古今著聞集 巻六)

③「此の様々形したる物数もしらず。何の類何の所より来れるぞ。」(発心集 第四)

④百僧ヲヒキグシテ、難波津ニユキ向テ待チ給ニ、波羅門僧正、天竺ヨリ船ニノリテ来り給フ。(沙石集 巻五末)

⑤そのふね、やう〜きたりちかづくをきくに、まことに神妙なりけり。(古今著聞集 巻六)

これらのうち①～④の場合、単線の傍線部（これらを「単線部」とよぶ。）はいずれも一語の動詞「来たる」だと考えるのが妥当であろう。その理由は、もし単線部のことばが動詞「来」の連用形+(完了の)助動詞「たり」であったならば、複線の傍線部（これらを「複線部」とよぶ。）のようなことばがその下に付くことを認め難いからである。その理由を①から④まで個別に述べよう。

①の場合、助動詞「たり」の下に助動詞「る」が付く可能性は認め難い^{註2}。

㊦の場合、「たり」の下に全く同じ完了の助動詞「たり」が付くことは普通あり得ない。

㊧の場合、「たり」の下にいわゆる完了の助動詞「り」が付けば蛇足である。

㊨の場合、「たり」の下に補助動詞「給ふ」が付くことは考えられない。

以上述べたような理由で㊦～㊨の場合、単線部はすべて一語の動詞「来たる」である。㊧の場合、単線部は連用中止になっているとも考えられるが、もしそうでない場合、助動詞「たり」の下に動詞が付いていると考えるのは無理であり、動詞「来たる」の下に別の動詞が付いていると考えなければならない。このように㊧の場合は接続をみる方法では必ずしもすっきりと解決し切れないので、他の方法についても考えてみなければならない。

次に、㊡文体を手がかりにする方法について述べよう。同じ「来る」の意味を表わすのに、たとえば中古の仮名文では原則としてカ変動詞「来」が用いられ、漢文訓読文では原則として四段活用動詞「来たる」が用いられる傾向があった²³。このことから考えると、漢字仮名交じり文体である中世説話の諸作品においては一般に「来たる」が「来」よりも多であろうと思われる。しかしながらこの㊡の観点からは用例を一つ一つ確実に判定することは非常に困難であって、全体としての傾向を考え得るにとどまるものである。中世説話の個々の作品の漢文訓読調および和文調の度合いがまだ十分明らかにされていない現段階では細部にわたる記述はさし控えざるを得ない。ここではやむを得ず便宜的に考えて、中世説話の五作品が漢字仮名交じり文体であるから、㊧のような場合はすべて一語動詞「来たる」として扱うことにした。

次に、㊢文脈において一例ずつ意味を判定する方法であるが、これは三つの方法のうちで実践の最も困難な方法である。「たり」は完了の助動詞といわれてはいるが、その表わす意味をすっきりとまとめることはむずかしく、カ変動詞「来」が助動詞「たり」に付いてできた連語「来たり」と、いわゆる四段動詞「来たる」との意味の区別をはっきりつけることは概して非常に困難である。この方法は中世説話の用例においても客観性を保ちにくいと考え、この方法を使うのをここでは断念せざるを得ない。

以上、㊠㊡㊢の方法について述べたが、結局、十分に信頼できるのは㊠の接

続による方法である。本稿では①の方法で検討した用例は解決したものとして扱い、それで処理できなかった用例は②の方法により、中世説話が漢字仮名交じり文体であることを考えて、便宜的にすべて一語動詞「来たる」とした。

上に述べたような取捨選択を経たうえで中世の五つの説話作品における「たり」と「り」との用例数を第1表にまとめてみた。

(第1表)

作品名	た り		り	
	地の文	会話文	地の文	会話文
沙石集	629	212	554	131
発心集	392	112	199	62
十訓抄	800	133	327	66
著聞集	1782	216	206	51
宇治拾遺	1239	329	102	49

第1表に示した調査結果に少しは用例の見おとしがあるかもしれないけれども、本稿の論旨に直接の影響はないであろう。

鎌倉時代には一般に「たり」が「り」よりも多く使われるようになっていたことは周知の通りであるが²⁴、第1表におさめた五作品においてもすべて「たり」が優勢である。そして、それらの作品において「たり」と「り」との割合を比べるとそれぞれ違いがある。

たとえば、五作品それぞれにおいて地の文と会話文とに分けて、「たり」と「り」との合計に対する「たり」の割合を出してみると次のようになる。『沙石集』(地の文-53%)(会話文-62%)・『発心集』(地の文-66%)(会話文-65%)・『十訓抄』(地の文-71%)(会話文-67%)・『古今著聞集』(地の文-90%)(会話文-81%)・『宇治拾遺物語』(地の文-92%)(会話文-87%)である。(いずれも0.1%の位を四捨五入した。本稿でこの場合のほかにも%で数値を示す時は同じ要領で四捨五入することにする。)この結果をみると、「たり」の占める割合は、地の文において大きい作品は会話文においても大きく、逆に地の文において小さい作品は会話文においても小さいという傾向が五作品すべてにみられる。「たり」の占める割合によって五作品に仮に順位をつけると、地の文と会話文とのいずれの場合にもすべて同じ作品は同じ順位を占めている。第1表におさめた作品は上から下へ順番に「たり」の割合が小から大へとなるよう

に並べたものである。

2

中世説話における「たり」の各活用形の分布をまとめてみると第2表のようになる。第2表に用例数をまとめるにあたっては「たり」の下接語にだけ異文

(第2表) 「たり」

活用形	沙石集		発心集		十訓抄		著聞集		宇治拾遺	
	地	会	地	会	地	会	地	会	地	会
未然形	9	7	5	6	8	8	7	17	16	21
連用形	150	21	147	13	336	15	1010	26	300	53
終止形	145	59	46	21	89	30	164	35	257	59
連体形	293	97	180	63	342	65	573	122	561	158
已然形	30	28	8	5	24	9	25	13	102	33
命令形	0	0	0	1	0	2	0	0	0	2

④上の表において、「地」は「地の文」を、「会」は「会話文」をあらわす。

の存在する例も除いた。第1表の用例数との違いはこのためである。(「り」の場合も同じである。)各活用形の用例数をまとめるにあたってこういう取捨選択をしたのは、のちに述べるような各活用形の用法をみるのに、より厳密なデータが得られると考えたからである。

第2表をみると命令形に用例のない作品が二つあるけれども、どの作品も活用形がかなりよくそろっている。そしていずれの作品も連用形・終止形・連体形が数多く使われているが、『宇治拾遺物語』の地の文と会話文、『沙石集』の会話文などにおいては已然形も小さからぬ割合を占めている。また、各作品において最も用例の多いのは、『古今著聞集』の地の文の場合を除いて、すべて連体形である。二番目に用例の多いのは、地の文では四作品が連用形で、会話文では五作品とも終止形である。(『古今著聞集』の地の文では連用形が最も多い。)上に述べたようにわずかの例外を除いて連体形が最も多い傾向は同じ中世説話の「り」にも共通することである。そして連体形は地の文でも会話文でも大部分が連体修飾の用法であり、これも「たり」と「り」とは同じ傾向である。(「り」

については後に述べる。)

「たり」は上代においても連体形が最も多く^{註5}、中古の仮名文においても連体形は一般に優勢で、その様子は第3表に示す通りである^{註6}。漢文訓読語の傾向については詳しいことはわからないが、院政期の「興福寺本大慈恩寺三蔵法師伝古点」においては合計29例のうち、未然形が2例、終止形が21例、連体形が5例、已然形が1例みえている^{註7}。

(第3表) 「たり」

活用形 作品名	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
古今集(歌のみ)	0	0	2	12	1	0
竹取物語	6	10	34	43	4	0
伊勢物語	2	49	11	28	2	0
大和物語	4	21	19	62	7	0
提中納言物語	10	15	28	107	20	0
浜松中納言物語	44	54	48	200	53	0
土左日記	0	5	15	16	4	0
蜻蛉日記	14	70	218	329	140	0
和泉式部日記	5	9	25	53	45	0
紫式部日記	11	20	68	207	14	0
更級日記	9	24	35	142	38	0

「たり」は形成されるにあたって、その連体形が中心になったといわれているが^{註8}、そういう事情を背景にもつ「たり」が上代から少なくとも鎌倉時代あたりまで連体形の用例を多くもっていることに注意しておく必要がある。

さて、中世説話の五作品において『古今著聞集』の地の文だけは連用形が最も多いことをさきに述べた。ここでそれら五作品の連用形の下接語を第4表にまとめてみた。それらのうち、活用するものは終止形で示した。本稿ではすべてその方針である。

第4表をみるといずれの作品においても地の文では「けり」が多く、会話文

(第4表) 「たり」の連用形の下接語

作品名	下接語	け	き	つ	け	な	(接尾語)
		り			む	ど	
沙石集	地の文	131	18	1	0	0	0
	会話文	3	15	3	0	0	0
発心集	地の文	136	4	0	7	0	0
	会話文	4	8	1	0	0	0
十訓抄	地の文	316	9	1	8	1	1
	会話文	6	4	4	1	0	0
著聞集	地の文	980	15	3	11	0	1
	会話文	9	11	5	1	0	0
宇治拾遺	地の文	286	8	3	3	0	0
	会話文	10	22	20	1	0	0

では『十訓抄』を唯一の例外として「き」が多いことがわかる。地の文において『古今著聞集』の「けり」は全体の97%を占めている。同じく地の文における他の四作品について「けり」の占める割合を出すと『沙石集』87%・『発心集』93%・『十訓抄』94%・『宇治拾遺物語』95%である。これらのうちで『古今著聞集』が用例数も最も多く、占める割合も最大であるが、他の作品もすべてかなり大きな割合を占めている。

『万葉集』において吉田金彦先生の調査されたデータによれば「たり」は「連用形九例中、六例まで『たりけり』で、『たりし』が一例ある。」ということである^{註9}。中古の仮名文においても「たりけり」という接続は多い。それらにおいて連用形の全用例中に「たりけり」と「たりき」とが何例あるかを第5表に示した。

(第5表)

作品名	竹取物語		伊勢物語		大和物語		提中納言物語		浜松中納言物語		土左日記		蜻蛉日記		和泉式部日記		紫式部日記		更級日記	
	地	会	地	会	地	会	地	会	地	会	地	会	地	会	地	会	地	会	地	会
たりけり	4	1	47	0	148	1	8	0	7	8	0	0	26	4	4	0	6	1	3	2
たりき	0	3	0	1	2	3	4	2	22	12	3	0	12	8	1	2	11	0	10	7

第5表より次の事柄がよみとれる。

⑦物語については、地の文では一般に「たりけり」が優勢で、会話文では

「たりき」が多い。

④日記については一般に「たりけり」も「たりき」もともに地の文に用例が多い。(『土左日記』の「たりけり」と『和泉式部日記』の「たりき」の場合は用例が全くなかったり極端に少なかったりするので、上の傾向と異なるものかどうかは不明である。)

なお、漢文訓読語における傾向は今のところわからない。

上に述べた範囲で「たり」の連用形の下接語について各時代及び各ジャンルの傾向を比較してみると、中世説話は中古の物語の傾向にかなり似ているといえる。日記文学で地の文に「たりき」の多いことをさきに述べたが、それは日記の地の文が物語の地の文などとは性格が異なり、一般にかなり主観的な叙述が多いからではないかと思われる。

次に中世説話の「たり」の各活用形の用法をまとめておこう。まとめるにあたっては次の要領でおこなう。五作品を合わせたすべての用法をあげるのではなく、それらのうちで最も広い用法をもつ『古今著聞集』にみえる用法をすべて記す。それらは地の文の用例と会話文の用例とを合わせたものとする。つまり、地の文と会話文との両方にみられる用法は、どちらか一方の用例で代表させる。そうする理由は『平家物語の語法』(山田孝雄著)にまとめられた用法と比較するための便宜によるものである。中世説話における用法のまとめ方について『平家物語の語法』の記述方法を参考にした。引用する用例は『古今著聞集』からはすべての用法を取り上げたが、それだけに限ってしまうと単調になるので他の作品からも『古今著聞集』と同じ用法のものを一例ずつ引いておいた。ただし、紙幅の関係で一部はそれを省略したところがある。それはそのつど記した。なお○印を付けた用法は『平家物語の語法』に載っているものである。『平家物語の語法』に載っていない用法には△印を付けた。

未然形の用法

○接続助詞「ば」の付くもの

「狩俣をゆるされば^(を)、おつけをつかうまつりて、持にし侍らん。」(古今著聞集 卷九)

イワバ、劣タレ^(い)バコソ勝タレ、勝タラ^(か)バマケナマシ。(沙石集 卷三)

○助動詞「む」（「ん」）の付くもの

「……法印として、僧正の弟子をもちて上に居たらんこそ、希代の事にて侍らめ。」

（古今著聞集 卷二）

御門「さて、なにも書きたらん物は、よみてんや。」（宇治拾遺物語 四十九話）

△助動詞「むず」（「んず」）の付くもの

「……出家の身にて口入せむこと、すゝめ法師に似たらんずれば、その願とげて後、相計べし。」（古今著聞集 卷十五）

○助動詞「まし」の付くもの

彼卿いまだ存せられたらましかば、いかに色をもそへて目出がり申されましと、哀に覚侍り。（義孝）（古今著聞集 卷五）

「……少将いきたらましかば、三公の位をばきはれざらまし。」とのたまひたりけり。（十訓抄 第五）

連用形の用法

○助動詞「き」の付くもの

「……信正をり〜に、『此事むざんにおほゆる。』とて、如法経を書たりし。」

と、かたり侍けり。（古今著聞集 卷二十）

「……しばらくの命をたすけて返されたりしかども、猶心（む）のおろか〔に〕おこたりて、（宇治拾遺物語 百二話）

○助動詞「けり」の付くもの

たなばたまつりしたりけるかたあり。（古今著聞集 卷五）

大方、上より下ざま、でのゝしりたりけり。（十訓抄 第七）

○助動詞「つ」の付くもの

「関白の馬のつまづきたりつるを、隨身かつかりやりたりつるこそ、おもしろかりつれ。」（古今著聞集 卷十四）

「……『南無大悲観音』ト、一声唱タリツル故ト覚ル、命ノタスカリヌル。……」（沙石集 卷十本）

○助動詞「けむ」（「けん」）の付くもの

集など入たらんおもても優なるべしと思て、いかゞしたりけん、花園のおとゞに申そめてけり。（古今著聞集 卷五）

やはらかぶりをして、くらまぎれに父の大臣に暇を乞ひ給ひければ、おのづから其の気色やあらはれたりけん。（発心集 第五）

○接尾語「げ」の付くもの

ゆ、しくはからひ申たりげにていふを、人〜わらひの、しる事がぎりなし。

(古今著聞集 卷十六)

「青柳の」と五文字をいだしたるを、候ひける女房たち、折にあはずと思ひたりげにてわらひ出したりけるを、(十訓抄 第四)

終止形の用法

○普通に終止したもの

檀紙に書て桜の枝に付られたり。(古今著聞集 卷五)

この侍、しおほせてみたり。(宇治拾遺物語 七十七話)

△係助詞「なむ」「なん」の結びとなったもの

詩にいはいく、「蒼茫タル雲雨知ルヤ吾ヲ否ヤ。其奈將スルヲ掃ラント於帝京」となん作られたり。(古今著聞集 卷四)

○格助詞「と」の付くもの

うけま(る)いらせられければ、即飛帰て、御袖にいらせ給たりと申つたへて侍り。されど此事おぼつかなし。(古今著聞集 卷一)

彼の預りタル檢非違使ガ夢ニ、金色ノ阿弥陀ノ像ヲシバリテ、柱ニユイ付たりト見ル。(沙石集 卷十本)

○接続助詞「とも」の付くもの

「鯉調備するやうをば存知たりとも、食やうをばしらし。食て見せん。」(古今著聞集 卷十八)

人々より合て、さるべきあそびなどせんには、たとひ身にとりて安からず、口惜き事にあひたり共、(十訓抄 第七)

○間投助詞「や」の付くもの

すなはち、「えたりや〜」と大声をい出す時、(古今著聞集 卷十二)

「丹後へつかはしける人は参りたりや。いかに心もとなくおぼすらん。」(十訓抄 第三)

連体形の用法

○連体修飾語となったもの

前の大和の守藤原重澄は、賀茂につかうまつりて、大夫の尉までのぼりたるものなり。(古今著聞集 卷一)

「このやまひのありさま、うち任せたることにあらず。……」宇治拾遺物語 六十話)

○「ごとし」の補格に立つもの

人あやしみさはぎて、とかくとりおろしたれば、死たるがごとくなりけり。(古今著聞集 卷十七)

証月坊上人ノ思切テ通世セラレタル如ニ思立バ、(沙石集 卷十本)

○主格に立つもの

^(おん) 聴聞の女房の中に、ある念仏者を心がけたるありけり。(古今著聞集 卷十六)
白張に立烏帽子きたる男の、薬沓はきたるが、立文をもちて来れり。(古今著聞集 卷二)

一句すぐれたるはおほけれども、四句の体ことなるによりて、ありがたき事にや。
(古今著聞集 卷四)

たがひになさけふかきをもと、すべきにこそと、昔より申つたへたるも、^(お) ことばりにおほえ侍り。(古今著聞集 卷八)

(上に引用したものと同一用法の例が『発心集』・『沙石集』・『十訓抄』・『宇治拾遺物語』にもみられるが、ここでは紙幅の関係で引用を省略する。)

○補語になったもの

治部卿の侍、馬の允なにかごとかやいひける老者、香の直垂のしほれたるきて、
(古今著聞集 卷十六)

後江相公かきたるをみて、渤海の人感涙をながしける。(古今著聞集 卷四)
方へにげのがれにけれど、よくきはれたるによりて、うとめ増円とぞ人はいひける。(古今著聞集 卷十六)

御堂殿は、すこしもさはがせ給はで、人々に尋きかせ給て、「馬のはなれたるにこそ。」と仰られけり。(古今著聞集 卷十三)

さて又、侍七八人をならべ居させて、端にみたるより次第に肩を踏で、(古今著聞集 卷十一)

(上に引用したものと同一用法の例が『宇治拾遺物語』・『沙石集』・『十訓抄』・『発心集』にもみられるが、ここでは紙幅の関係で引用を省略する。)

○「なり」の付くもの

それよりあまねく尋ければ、この雅経のよみたるなりけり。(古今著聞集 卷一)
「こはいかに。我親のいき返おはしたるなめり。……」(宇治拾遺物語 百八話)

○「やらむ」の付くもの

その鴨、ゆきがたをしらずうせたりければ、いかなるもの^(の)、すみたる哉らんと、
(古今著聞集 卷二十)

解脱房・明恵房ゾ、イツチエ行キタルヤラン、ミヘヌト申ケル。(沙石集 卷十末)

△副助詞「だに」の付くもの

さばかりの小冠をかたきにて、つきころしたるだにおもはずなるに、はてにはへしふせられて、刀うばひとられて、（古今著聞集 卷十五）

扇をさしかくしていみじげに居たるだにあさましきに、（十訓抄 第一）

△副助詞「ばかり」の付くもの

「御身は兵士のためにそへられたるばかり也。……」（古今著聞集 卷十二）

「……寺々モ持齋ニテ有ケルニ、次第ニ^{まじ}廢テ、只髮ヲ剃リ、衣ヲ染タル計ニテ、……」（沙石集 卷六）

△助動詞「べし」の付くもの

此野にかならず敵ふしたるべし、からめ手をまはすべきよし下知せらるれば、（古今著聞集 第九）

利仁が宿衣をきせたれども、身の中しすきたるべければ、いみじう寒げに思たるに、（宇治拾遺物語 十八話）

○助動詞「らむ」（「らん」）の付くもの

「……降人にま^(る)いりたりとも、本の意趣は残たるらむものを、脇をそらして矢をさゝする事あぶなき事なり。……」（古今著聞集 卷九）

「定て伝へられたるらん。一見せばや。」と仰事あり。（十訓抄 第十）

○接続助詞「が」の付くもの

夢に別当常住みな見知たる物ども、此まりを興じてほめあひたるが、別当「いかでかくばかりの事に、纏頭まいらせざらん。」とて、（古今著聞集 卷十一）

同国ニアル小法師、流ニソヒテ河ヲ下ケルニ、主ノ僧ハスコシサキ立タルが、河ニヨリテ水ヲスクヒテ吞トスルヲ、（沙石集 卷八）

○接続助詞「に」の付くもの

さしもはるかなる道を、しかも病につかれたる身にて、からくしてのぼりたるに、むなしく出にける、いかにほいなかりけむ。（古今著聞集 卷十五）

物はよくつみたるに、はかしくしき人もなくて、たゞ、この我舟につきてありく。（宇治拾遺物語 百二十三話）

○係助詞「ぞ」に対する結びとなったもの。

天人衆をば八幡宮寺の橋上にて、大童子にならひたるとぞいひつたへたる。（古今著聞集 卷六）

境近都城故無車馬之煩 路經山野故有雉兔之遊 とぞか、れたる。（十訓抄 第十）

○係助詞「や」に対する結びとなったもの

「師子にや似たる。」といひたりければ、(古今著聞集 卷十)

「マホリバシヤモチタル。」ト云ニ、(沙石集 卷七)

△係助詞「か」に対して結びとなったもの

「汝何によりてか此山の中にふしたる。」(古今著聞集 卷二)

「此世に哥よみ多く聞ゆる中に、いづれかすぐれたる。……」(十訓抄 第一)

○係助詞がなくて連体形で終止したもの

「八幡へまかる使に、きと申べき事ありて、まうでたる。」(古今著聞集 卷六)

その家の上童(つゝ)をかたらひて、問ひきけば、「大姫御前の、紅は奉りたる。」とかたりければ、(宇治拾遺物語 四十一話)

○格助詞「と」の付くもの

かしこまり(み)いたると見るほどに、夢さめぬ。(古今著聞集 卷十七)

あまり事はまりて、とばかり物もいはず、あきれたる様にて居たると見る程に、(発心集 第八)

○副助詞「など」の付くもの

嵯峨野の幸行に、御輿の上に虎の皮をおほひたるなど、(古今著聞集 卷十一)

夜もすがら、我したるなど、聞えやあらんずらんと、(宇治拾遺物語 百三十二話)

○終助詞「ぞ」の付くもの

「いづくぞ」と問へば、「頭を射られたるぞ。」といふ。(古今著聞集 卷十二)

「余〔ニ〕和光同塵ガ久ク成テ忘レタルゾ。」(沙石集 卷一)

○終助詞「か」の付くもの

しにたるかと思れば、猶はたらきけり。(古今著聞集 卷二十)

「……あやしくて、『若しくだりのびたるか。』と尋ぬれば、……」(発心集 第八)

△終助詞「よ」の付くもの

むなしくかへりたるよと、ほいなくおぼしめすに、(古今著聞集 卷八)

「此の馬ノシサリ候時ニ、尻カラ渡ムト思ヒタルヨト心へテ、……」(沙石集 卷八)

已然形の用法

○接続助詞「ば」の付くもの

うしろの方より馳来るものありける、見婦たれば、多近方也。(古今著聞集 卷六)
くだ物など食はせたらば、打ちくひて立ちけるを、(発心集 第六)

○接続助詞「ども」の付くもの

白虫は下藤などは、なべてみなもちたれども、(古今著聞集 卷二十)

もときたる衣^(きぬ)二がうへに、利仁が宿衣をきせたれども、(宇治拾遺物語 十八話)

○係助詞「こそ」の結びとなったもの

季武、はじめこそふしぎにてはづしたれ、此度はさりともと思て、(古今著聞集 卷九)

コレこそ、「マケタレバこそ、カチタレ。」ノ風情ナレ。(沙石集 卷三)

上に述べたのは『古今著聞集』にみえるすべての用法であるが、それらのうち『平家物語の語法』に載っている用法(○印のもの)は31ある。一方、『平家物語の語法』に載っていない用法(△印のもの)は七つある。また、『平家物語の語法』に載っていて『古今著聞集』にみえない用法は少なくとも二つある。一つは連用形の「～たり…たり」という用法であり、二つめは連体形に「こさんなれ」の付くものである。(以上の二つの用法については『平家物語の語法』下、1280・1282頁参照。)『古今著聞集』には連体形に「こそ」の下接する例はみられない。

以上のように、中世説話の五作品のうちで最も多くの用法をもつ『古今著聞集』の例と『平家物語の語法』にまとめられた『延慶本平家物語』の例とを比べてみたのであるが、どちらの作品がより多くの用法をもつかは今のところ断定できない。それをするためには、中世説話の用例を扱ったのと全く同じ基準で『延慶本平家物語』の全用例を整理しなければならないからである。しかし、これまでに述べてきたことから「たり」について次のような点は指摘できる。

㊤『古今著聞集』にみられる用法と『延慶本平家物語』にみられる用法とは共通のことが多い。㊦『延慶本平家物語』には中世説話にみられない新しい用法が一部分存在する。(たとえば連用形の「～たり…たり」など。)

なお、『平家物語の語法』によれば、「たり」の終止形・連体形のうちには「た」となった例がある由であるが(下、1286頁)。中世説話の五作品においては『沙石集』に次の一例がみられるに過ぎない。

「庵室ノ房主、尼ヲ呼テ、『スワ^(ハ)〜煩惱ノヲコリ^(オ)タワ^(ハ)。湯沸シテ行水ノ用意シ給へ。』ト申セバ、……」(沙石集 卷四 第六話)

テキスト(日本古典文学大系)のこの巻の底本は、お茶の水図書館蔵梵舜本であ

るが、市立米沢図書館蔵本によれば、上に引用したのと同じところは「……起くろタルハ……」となっている由である。その市立米沢図書館蔵本を翻刻した『広本沙石集』（渡辺綱也編）から、上に引用したのと同じところを引いておこう。

庵室ノ房主尼ヲ喚テ、スハスハ煩惱ノ起タルハ、湯ヲワカノ行水ノ用意シ給ヘト申セハ、（広本沙石集 卷四 第十話）

『沙石集』においてはこのような本文の異同があるので、それぞれの本文の性格を明らかにしてからテキストとして利用するべきであるが、それは今後の課題としたい。

3

次に中世説話における「り」の各活用形の分布をまとめてみると第6表のようになる。第6表に用例数をまとめるにあたっては「り」の下接語にだけ異文

(第6表) 「り」

活用形	沙石集		発心集		十訓抄		著聞集		宇治拾遺	
	地	会	地	会	地	会	地	会	地	会
未然形	2	2	0	1	1	0	0	0	1	2
連用形	2	1	14	0	58	1	42	0	19	1
終止形	418	49	79	14	107	22	66	21	48	10
連体形	129	79	100	44	158	43	95	29	31	34
已然形	1	0	1	2	2	0	1	0	2	1
命令形	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1

の存在する例も除いた。第1表の用例数との違いはこのためである。

第6表をみると、地の文では一般に終止形・連体形が多く、連用形がそれらに次いで多い。会話文では一般に終止形・連体形が多い。そして『沙石集』及び『宇治拾遺物語』の地の文に限り終止

形が最も多いけれども、それ以外は、地の文にも会話文にも連体形が最も多い。このように大部分の作品に連体形が最も多い点では同じ中世説話の「たり」に似ている。しかし、終止形の占める割合は「り」の方が大きく、已然形の用例は「り」の方が少ない、などの点で「たり」と違っている。

「り」は上代においても連体形が最も多い^{註10}。中古の仮名文においても連体

形は多いけれども、「たり」の場合ほど圧倒的ではない。中古の仮名文の実態については第7表にまとめた通りである^{註11}。

(第7表) 「り」

活用形 作品名	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
古今集(歌のみ)	0	0	7	70	9	0
竹取物語	1	1	34	19	2	0
伊勢物語	2	48	10	39	1	0
大和物語	1	61	12	13	1	0
提中納言物語	0	2	22	30	9	0
浜松中納言物語	5	45	37	271	40	0
土左日記	1	12	16	71	5	0
蜻蛉日記	3	6	26	43	5	0
和泉式部日記	0	0	6	5	3	0
紫式部日記	0	1	38	48	0	0
更級日記	2	1	5	23	0	0

漢文訓読語においては、「り」は終止形・連体形よりほかに未然形・連用形・已然形もしばしば用いられているといわれている^{註12}。

上代から中世までをみた場合、「り」も一般に連体形が多いことは上に述べた通りであるが、「り」に一般に連体形の多い理由については吉田金彦先生の御説があり、次のように述べておられる。——「意味の陳述性においても、連体形は活用形中最も客観性の高いもので、主観度としては低いものであるから、…(中略)…〈現在態〉の『……ている……』という『る』の意味が連体形という形態によく合致する^{註13}。」——

「り」に関して、中世説話の五作品のうち『沙石集』と『宇治拾遺物語』との地の文だけは終止形が最も多いことをさきに述べた。その他の三作品の地の文と五作品すべての会話文ではいずれも終止形が二番目に多い。中世説話の「たり」においては、さきに述べたように、地の文では連用形が二番目に多い作品

が四つあり、会話文では五作品すべて終止形が二番目に多い。

以上述べてきたことを大ざっぱに言えば、中世説話のほとんどの作品において、「たり」も「り」も連体形が最も多いということである。そしていずれも連体修飾の用法が大部分を占めている。

けれども、それに次いで用例の多い活用形は「たり」と「り」とで違いがある。そこで、二番目に用例の多い活用形についてまとめると次の㊶・㊷のようにいえる。

㊶「たり」は、地の文では連用形が多く、会話文では終止形が多い。

㊷「り」は、地の文でも会話文でも終止形が多い。

用言において一般にどの活用形が主観的な表現をうけ持ち、また、どの活用形が客観的な表現をうけ持つかということについては吉田先生も述べられたように、終止形は主観的であり、連用形は主観的な場合と客観的な場合とがあり、連体形（特に連体修飾の用法をさす。）は客観的である^{註14}。（連用形の主観的な場合とは連用中止をいう。）以上のことは助動詞についてもいえる。筆者の判断によれば、中世説話の「たり」には連用中止であると思われるものは一例もみられず、「り」においては次の一例だけが、連用中止ではないかと思われるものである。

和尚これを聞きて、定て様あらんと思て、此老僧が傍にゐて、囲碁うつあり様を見れば、一人は立^(き)り、一人は居りとみるに、忽然として死ぬ。（宇治拾遺物語 百三十七話）

そうすると中世説話の「たり」と「り」との連用形はほとんどの例が客観的表現であると考えられる。このように活用形によって主観的または客観的という見方をすると、中世説話は「たり」も「り」も一般に連体形（大部分が連体修飾の用法である。）が一番多いので、客観的表現が一番多いといえる。このような基本的性格をふまえたうえで、上に述べた㊶・㊷のことがらを考えると、——㊶「たり」は、地の文では客観的表現が多く、会話文では主観的表現が多い。㊷「り」は、地の文でも会話文でも主観的表現が多い。——ということが部分的にいえる。これはあくまで部分的であるが、内容としては中世説話の「たり」と「り」との違いである。

次に中世説話の「り」の各活用形の用法をまとめておこう。まとめる要領は「たり」の場合と大体同じであるが、中世説話の「り」において最も広い用法をもつ『十訓抄』の各用法の例をすべて記し、他の四作品のうちからも上と同じ用法のものを原則として一例ずつ引いておいた。なお、『平家物語の語法』において「り」（同書では「動作存在動詞」とよばれている。）は上接語を中心にまとめられているので、下接語について詳しいことはわからない。したがって中世説話などと各活用形の用法を比較するのは他日を期したい。

未然形の用法

助動詞「む」（「ん」）の付くもの

か様の妻に伴へらん男はたのもしくや。（十訓抄 第五）

「……。へノ方ニ行テ、ウチカヘテフセラム。」（沙石集 巻八）

連用形の用法

助動詞「き」の付くもの

高祖つゝがなくてつみに項羽をほろぼして、天下をとれりしほどに、（十訓抄 第三）

彼の天竺は南州の最中、まさしく仏の出給へりし国なれど、（発心集 第八）

助動詞「けり」の付くもの

「是に侍り。申べき事あり。」といへりければ、（十訓抄 第一）

墨つきたりけるが、あざにたがはずなん侍ければ、みな人ふしぎの事なんおもへりける。（古今著聞集 巻十一）

終止形の用法

普通に終止したもの

「……盗をするたぐひ、只直しき心ひとつなきによれり。」（十訓抄 第六）

「此の符ハ我モ知レリ。……」（沙石集 巻十末）

格助詞「と」の付くもの

桀紂は天子たりしかども、顔閔がいやしき身におとれりといへるも、賢愚をくらぶるにたとへたり。（十訓抄 第三）

律師は出挙をして命つぐばかりを事にし給へりと聞くに、（発心集 第二）

接続助詞「とも」の付くもの

「……親もしおごれりとも、孝子つゝしみてしたがはゞ其家全かるべし。……」（十訓抄 第六）

「……^何ノ日死セリトモ、廿四日ニ我月忌ヲスベシ。……」（沙石集 卷二）

連体形の用法

連体修飾語となったもの

神崎の君かねがもとへおはしけり。今は官もなき徒者になれる由也。（十訓抄 第九）

蛇の尾を汀よりさしあげて、わが立^(た)てる方ざまにさしよせければ、（宇治拾遺物語 百七十七話）

「ごとし」の補格に立つもの

ふくさのきぬにてをしければ、かけるごとく写りて鮮かによまれけり。（十訓抄 第七）

古今の序にいへるがごとく、人の心をたねとして、よろづのことの葉とぞ成にける。（古今著聞集 卷五）

主格に立つもの

忽に宝殿ひゞき給へいとゞ忝し。（十訓抄 第十）

「孔子飲を盗泉の水に忍び、曾參車を勝母の里にめぐらさず。」といへるは、（十訓抄 第六）

此詩の一句を誦して入給ぬと、かの物がたりにかけるこそおかしけれ。（十訓抄 第六）

「其事なり。宸筆を破りなせるもはゞかりなり。」（十訓抄 第五）

（上に引用したものと同一用法の例が『古今著聞集』・『宇治拾遺物語』・『沙石集』・『発心集』にもみられるが、紙幅の関係で引用を省略する。）

補語になったもの

「……何曾が晋の政のおごれるを諫ずして、家にかへりてしりうごとしける、…」（十訓抄 第六）

「汝我に縁つきし事、樋の水をこぼせるに同じ。……」（十訓抄 第九）

（上に引用したものと同一用法の例が『宇治拾遺物語』・『発心集』・『古今著聞集』・『沙石集』にもみられるが、紙幅の関係で引用を省略する。）

「なり」の付くもの

豊明の節会とて、年々不斷今におこなはる。舞姫といふは彼神女をうつせるなり。（十訓抄 第十）

「……さかしき事をし給ひて、又畜生の業をのべ給へるなり。」（発心集 第八）

副助詞「ばかり」の付くもの

「……此等は身のためをかまへ、へつらへる計にて、……」(十訓抄 第六)

「……たゞよにしらぬにほひのうつれるばかりをかたみにて、……」(古今著聞集 卷八)

接続助詞「に」の付くもの

さしあたりて人なき時は能々をしへいましめて、あるべき様いひしらせて、取出せるに、其上猶あやまちをも僻事をもし出づるは、(十訓抄 第七)

誰人ならんと、人々あやしうおもひあへるに、船は霧にこめられて見えず。

(古今著聞集 卷六)

格助詞「と」の付くもの

松浦明神とておはしますは、彼さよひめのなれるといひつたへたり。(十訓抄 第六)

数さしの金の洲浜に、金の鶴あまたたり。千とせつもれるといふ心なるべし。

(古今著聞集 卷十一)

副助詞「など」の付くもの

今もよき人は毎事うごきなく心浅からぬは、此翁が心に通へるなどぞみゆる。

(十訓抄 第六)

終助詞「ぞ」の付くもの

御子を男みこと心得て、あしく人の云なせるぞとかゝれたり。(十訓抄 第十)

「……山の中にも深き山なれば、鳥の声だにもきこえず。いかにして来れるぞ。」

(発心集 第四)

終助詞「か」の付くもの

「……物のつき給へるか。」といへば、(十訓抄 第六)

「……我を教へ(をし)に(きた)来れるか。わが心になはゞ、用ひん。……」(宇治拾遺物語 百九十七話)

終助詞「よ」の付くもの

川みづ閼水を以成川、水滔々而日度、世閼人而為世、人再々而行暮と云文をかけるよとおぼえていと哀なれ。(十訓抄 第九)

已然形の用法

接続助詞「ば」の付くもの

しばらく關たるにはしかず共いへれば、まことに累世清花の人なりとも、(十訓抄 第三)

「……いまかく尋ね来る人も無きを、思ひかけず来り給へれば、……」(発心集

第六)

接続助詞「ども」の付くもの

さまへいたはり養へば、命ばかりは生れども、足手腰もうち折て起居もえせず。

(十訓抄 第七)

「カ、ル世ノタメシ、眼ニサイキリ、耳ニミテレドモ、思ヒヨリテ驚ク心ナシ。」

(沙石集 卷五本)

『十訓抄』を中心にした中世説話の「り」の用法は大体上に述べたような状態である。『平家物語の語法』によれば、「り」については「……未然形の用例と已然形命令形の用例との全く見えざることなり。」(上、772頁)と記されているので、『延慶本平家物語』における「り」は中世説話の五作品のいずれよりも活用形が限られていることがわかる。なお、院政期に成立し、漢字仮名交じり文の代表的作品である『今昔物語集』の「り」については遠藤好英氏の論文がある。(『国語学研究』第7号〔昭和42年8月〕—今昔物語集における助動詞「り」について〔その文章史の一考察〕—)上の遠藤氏の論文において、活用形ごとの用法がまとめられているが、そこに記された用法をみると、本稿にまとめた『十訓抄』の用法よりもやや多いように思われる。『十訓抄』の用法は中世説話の他の四作品のいずれよりも多いのであるから、『今昔物語集』は中世説話の五作品のいずれよりも用法が多いということになる。

4

本稿では中世説話の「たり」と「り」とを各活用形に分けて下接語に着目して記述した。一般に上接語について詳しく述べた論文は多いのであるが、下接語について考察を加えたものはそれほど多くない。本稿に引用した著書・論文以外に、『品詞別日本文法講座・8』に収められた一完了の助動詞—(飛田良文氏執筆)などを参考にした。

中世説話の用例について、「たり」と「り」との上接語も検討してみなければならぬが、機会を改めて試みたい。

(注1) その判断については佐藤宣男『国語学研究』第5号(昭和40年8月)—「持てり」と「持たり」—を参照し、特に同誌の17頁上段～18頁上段に述

べられた御説を参考にした。

- (注2) 山田孝雄『奈良朝文法史』332頁に「屬性の作用を助くる複語尾は統覚の運用を助くる複語尾の下につくことなし。」と記されている。また、同『平安朝文法史』212頁に上と同じ趣旨が述べられている。
- (注3) 築島裕『平安時代の漢文訓読語につきての研究』552～557頁。
- (注4) 小松登美『解釈と鑑賞』22巻11号(昭和32年11月)―連用形に続く助動詞(たり)―、同誌の同号における築島裕―終止形に続く助動詞(り)―、橋本四郎『国文学』4巻2号(昭和33年12月)―「たり」の研究―及び―「り」の研究―、松村明編『古典語現代語助詞助動詞詳説』に収められた―たり(過去〔回想〕・完了)―及び―り(過去〔回想〕・完了)―(橋本四郎執筆)、塚原鉄雄『国文学』9巻13号(昭和39年10月)―たり(過去〔回想〕・完了)―及び―り(過去〔回想〕・完了)―、などを参照。
- (注5) 吉田金彦『上代語助動詞の史的研究』597頁。
- (注6) 用例の検索には次の諸索引を使用した。西下経一・滝沢貞夫『古今集総索引』、山田忠雄『竹取物語総索引』、大野晋・辛島稔子『伊勢物語総索引』、塚原鉄雄・曾田文雄『大和物語語彙索引』、鎌田広夫『提中納言物語総索引』、池田利夫『浜松中納言物語総索引』、日本大学文理学部国文学研究室『土左日記総索引』、佐伯梅友・伊牟田経久『かげろふ日記総索引』、東節夫・塚原鉄雄・前田欣吾『和泉式部日記総索引』、佐伯梅友・石井文夫・青島徹『紫式部日記用語索引』、東節夫・塚原鉄雄・前田欣吾『更級日記総索引』。なお、物語と日記との用例数は会話文と地の文とにおけるものであり、和歌の用例は除いた。また、上にあげた索引によって用例を取り上げる際に一部私意を加えた。テキストは原則として上記の諸索引と同じものを使用した。『浜松中納言物語』の場合に限り、索引のテキストである新註国文学叢書『浜松中納言物語』を閲覧することができなかったため日本古典文学大系本を使用した。ここに述べたことからは後に述べる「り」の場合も同じである。
- (注7) 築島裕『興福寺本大慈恩寺三蔵法師伝古点の国語学的研究』索引篇・訳文篇を参照。
- (注8) 春日和男『万葉』第7号(昭和28年4月)―助動詞「たり」の形成について(「てあり」と「たり」)―及び、同『存在詞に関する研究』245～246頁。
- (注9) 『上代語助動詞の史的研究』597頁。

- (注10) 『上代語助動詞の史的研究』609頁。
- (注11) 第7表に収めた諸作品のテキストや、用例の検索に使用した索引などは「たり」の場合(注6)と同じである。
- (注12) 春日政治『西大寺本金光明最勝王経古点の国語学的研究』研究篇 222頁(勉誠社版)、遠藤嘉基『訓点資料と訓点語の研究』187頁、築島裕『平安時代の漢文訓読語につきての研究』696～701頁などを参照。
- (注13) 『上代語助動詞の史的研究』616頁。また『現代語助動詞の史的研究』33頁参照。
- (注14) 『現代語助動詞の史的研究』32～33頁。